

# 28P-am475

生薬としての「玳瑁」

○多胡 彰郎<sup>1</sup>, 多胡 潤<sup>2</sup>, 柴田 有里<sup>3</sup>, 宮崎 啓一<sup>4</sup>(<sup>1</sup>日ウミガメ協, <sup>2</sup>大経大院  
営, <sup>3</sup>長岡実業, <sup>4</sup>日薬史学)

目的: 古来「玳瑁」は生薬として使用されてきたが、近年はその捕獲が制限されていることもあって、「15 改正 日局 生薬等」にも収録されておらず、生薬として使用されることは少ない。「玳瑁」の生薬としての記載は多いが、使用の変遷から見た報告は少ない。本報告はその使用の変遷を文献上でたどることによって「玳瑁」の生薬としての存在意義を考察する。

方法: 「玳瑁」に関する総説的な書物「本草綱目」及び日本における最初の研究書である「玳瑁龜圖説」を基点として展開した文献調査による。

結果・考察: 「史記集解」, 「食性本草」, 「新修本草」, 「虞衡志」, 「本草衍義」, 「西域記」, 「痘疹論」, 「日華子本草」等の中国古書に「玳瑁」に関する記載が見られる。これらの書物における伝聞と思われる玳瑁の産地、生態等に関する記載はほぼ同様で、その知見は現代のそれと多くの点で一致している。その効果・効能作用として解毒、精力増強、解熱、抗癲癇、抗痙攣、神経症治療、整腸、防虫、疱疹治療、疱疹予防、鎮静、生理不順改善等が記載されている。これら多様な作用は数種の書物に重複して見られることから、系統だって使用されてきたものと考えられる。「玳瑁龜圖説」における効果・効能作用及び生態は「本草綱目」の引用であり、江戸期の「玳瑁」の価格高騰による生薬としての使用量が減少したことについても記載されている。現代の「原色和漢薬図鑑」においても、「本草綱目」を始めとする古書の引用がほとんどであるが、処方例として至宝丸、中風經驗方、玳瑁丸の記載が特記される。古代中国から現代日本まで同様の記載の継続は、生薬として「玳瑁」が有用性を示しているが、資源枯渇・保護等により「玳瑁」が今後生薬として使用されることはほとんどないと考えられる。